

## 【永遠への思い】

[伝道者の書 講解・第10回]

『伝道者の書(コヘレトの言葉)』  
3章9～15節

熊谷 徹

2014年1月26日  
茅ヶ崎同盟教会礼拝説教

## 【序】永遠なる神；

前回は『伝道者の書(コーヘレスの言葉)』の第3章1節から8節を読んだ。伝道者はこう言った；「天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。(中略)愛するのに時があり、憎むのに時がある。戦うのに時があり、和睦するのに時がある。」。

この段落だけ見れば、伝道者・コーヘレスは、宿命論者あるいは運命論者のように思えて来るかもしれない。人は「定めの時」のもとに生まれ死ぬ、その間の人生の営みも全て「時」の支配下に置かれているのだとすれば、人はまるで「時の囚人」(Jones)のようである。だが、伝道者の心の中には、時を造り時を支配しているお方が存在している。今日の段落で彼はそのお方に目を向ける。この段落で重要な意味を持つ語は、「永遠」と「神」である。この段落に「永遠」は2回登場し(11,14)「神」は6回も登場する(10.11b.13.14.14.15)。この段落で伝道者の目は、「永遠なる神」に向けられる。

## 【1】労苦の価値(3:9-10)；

(1)伝道者は9節で、「日の下」で労苦する人間の労苦の意味を問うてこう言う；「働く者は労苦して何の益を得よう。」。

カール・マルクスは、「働かざる者、食うべからず」と言った。働くことと食うことは切っても切れない関係にある。だが何のために働くのだろうか。ただ単に食べるためだろうか。伝道者は後にこう言っている；「人の労苦はみな、自分の口のためである。しかし、その食欲は決して満たされない」(6:7)。

働くことは尊い、労働は美德である。ビスマルクは、「青年に勧めたいことはただ三つの言葉に尽きる。即ち、働け、もっと働け、あくまで働け」と言った。そうした考えを皮肉るかのようにアナトール・フランスはこう言った；「労働は、我々の無力を騙し、幸福への希望を与える。労働によって運命が左右されるかの如き錯覚を起こし、我々を得意にさせる」。

働くことは確かに尊い。しかし働くことと人間の価値とは必ずしも一致しない。作家ゴーリキーはこう言う；「人間の価値がその労働によって決まるならば、馬はどんな人間よりも価値がある。馬はよく働かし、第一、文句を言わない」と。労働は尊いと人は言う。しかしそれは本当だろうか。なぜ尊いのだろうか。働くことに何の価値と意義があるのだろうか。今から数千年も昔に伝道者はこの問を投げかけたのである；「働く者は労苦して何の益を得よう」と。

(2)働くことの意義、職業の意義には大きく言って3つあると言われる。第一は、人格的意義である。働くことを通し人格の陶冶をはかり自己の成長をはかることである。福沢諭吉は、「自ら労して自ら食うは人生独立の本源なり」と言った。働くことによって人は自主独立の人間となってゆくのだと彼は言うのである。ところがこの世には人格的陶冶・自己の成長を妨げたり人間性を墮落腐敗させる仕事が存在する。その典型がオレオレ詐欺のような犯罪となる仕事である。

働くことの第二の意義は社会的意義である。働くことを通して社会に貢献し隣人に仕えるのである。だから暴力団や犯罪団の仕事は卑しくて価値がない。社会的意義も人格的意義もまるでない仕事だからである。

働くことの第三の意義は経済的意義である。サン・シモンは「人はその能力に応じて働き、その働きに応じて与えられるべきである」と言った。人は、働きに応じて与えられる収入によって自分の経済基盤を確かなものとし、家族を養い、生活を豊かなものとするができる。職業の選択においてはこれら三つの意義を十分に考えるべきである。

現代の我々は、今から数千年も前に伝道者が投じた問い；「**働く者は労苦して何の益を得よう**」という問いに対して、以上のような三つの意義を挙げて答えることができる。即ち、「**労苦に益あり。労苦の益とは、自己の成長、社会への貢献、経済的基盤の確立である**」と答えることができる。

(3)しかし伝道者が問いかけているのはいささか次元が違う。彼の脳中には常に「死」という大問題が横たわっている。彼は、「人間の全ての労苦を無に帰してしまう死を前にして尚も価値のある労苦など存在するのか」と問いかけているのである。「死によって滅び去る人間の労苦にどれだけの益・価値があるのか。死を突き抜けて尚も益・価値のある労苦など存在するのか」と問いかけているのである。あなたならこの問いに何と答えるだろうか。あなたの労苦は、死によって無に帰するような虚しい労苦だろうか、それとも死後もなお価値を残すような価値ある労苦であろうか？…

死の問題が解決しない限り、「**働く者は労苦して何の益を得よう**」という問いに対する真実の答は、「**労苦に益なし**」である。なぜなら、死んでしまえば全ての労苦は儂く消え去るからである。死んでしまえば全ては終わる。労して益なし、労苦の意味を見出せない。それにもかかわらず人間には、働き労するほかにすべはないのである。働いていないと不安になり、生きていることに意味を見出せず、することがないということから来る虚しさに耐えられなくなる。だから人は仕事をし、働き続ける。それは「**神が人の子らに与えて労苦させる仕事**」なのだと伝道者は言う。10節である；「**私は神が人の子らに与えて労苦させる仕事を見た。**」。「**労苦させる仕事**」という表現は、「**労苦させる(アノース)**」という言葉と「**仕事(インヤーン)**」という言葉にコーヘレスお得意の言葉遊びがなされている。同じ語源(アーナース)の言葉を用いたこの表現には、「**仕事**」というものは決して楽しいだけのものではなく、辛さや苦しみを伴う「**労苦**」なのだ、という伝道者一流の皮肉が込められているのだろう。

ここで伝道者は「**神**」という言葉が登場させた。前の段落で「**時**」の謎に思いを馳せた伝道者はここで「**時**」を創造した「**神**」に目を向ける。「**時**」を創造し今も「**時**」を支配している「**神**」、即ち「**永遠なる神**」に思いを馳せるのである。それが次の11節の言葉へと繋がって行く。

## 【2】永遠への思い(3:11)；

(1) 11節前半で伝道者はこう語る；「**神のなさることは、すべて時にかなって美しい。**」。

今年、高校時代の同級生から年賀状が来た。彼と私は同じ大学の同じ学部に進学した。卒業後彼は研究者の道に進み、理学博士となり、大学教授になった。その彼から届いた年賀状にこう書いてあった；「思う所があってクリスマスに洗礼を受けました」。コーヘレスが言ったように、「**すべてのことに時がある**」。この友人が信仰を持つのにも相応しい「時があった」のである。そしてコーヘレスが、「**神のなさることは、すべて時にかなって美しい**」と言ったように、この友人がクリスチャンになったのも神が備えた「美しい時」だったと思うのである。

「**時にかなって**」という言葉は、前の段落(1-8)で語った「**時**」を受けている。そこでは伝道者は、「**天の下では、すべての営みに時がある**」と語った。「人間の営み」には「**時**」がある。人間が行う全てのことに「**時がある**」ように、「**神のなさることに時がある**」のである。人間が行うことは「**時**」に叶わないことが多すぎる。しなくてはならぬ時に為すべきことをせず、してはならぬ時に事を起こして失敗するのである。だが神にはそのようなことはない。「**神のなさることはすべて時にかなって美しい**」と伝道者は言う。

「**美しい**[ヤーフェー]」という言葉には「正しい、ふさわしい、適切だ、良い」とか「**好ましい**」(5:8)という意味がある。伝道者は、「**神のなさることは時にかなって美しい。神がなさるのはいつも最善の時であり最適な時なのだ**」と言うのである。なぜなら、神は「**時**」の創造者であり、「**時**」を超越した「**永遠の存在**」だからである。伝道者はここで「**永遠**」ということに思いを向ける。それが次の11節後半の言葉である；「**神はまた、人の心に永遠を与えられた。**」

(2) 「**神はまた、人の心に永遠を与えられた**」という句は難解である。

「**永遠**(ハー・オーラーム)」という言葉は、新改訳第二版は「**永遠への思い**」と訳した。口語訳も新共同訳も「**永遠への思い**」とか「**永遠を思う心**」と訳している。「**永遠への憧憬・憧れ**」(Pelitze)とか「**永遠という観念**」(Lys)と訳す人もいる。だが、ヘブル語原文には「**思い**」とか「**思う心**」「**憧れ**」「**観念**」などという言葉はない。単純に「**永遠**」と言っているだけである。だから新改訳聖書の第三版は原文通り「**永遠**」と訳した。

「**永遠**(ハー・オーラーム)」と訳された言葉だが、前の段落で長々と「**時**」について語られたということとの関係、及び、14節が「**永遠に**」という意味で使われていることからして、ここは「**永遠**」という意味に解すべきである。そうだとすると、新改訳第三版のように、「**神は人の心に永遠を与えられた**」となる(原文直訳は「**彼は彼らの心に永遠を与えた**」)。

「**永遠を与えた**」とは言っても、『伝道者の書』全体から見ると、「人間の心は永遠である」ということを述べたものとは考えられない。伝道者が何度も繰り返し説いているのは「**人間のはかなさ**」であって、「**人間の永遠性。人間は永遠の存在である**」ということではないからである。そもそも、伝道者にとって、永遠なるものは永遠なる神以外には存在しないのである。

日本初の日本語による『ヘブル語大辞典』の作製という偉業を成し遂げた名尾耕作という旧約聖書学者がいる(1996年没)。文語訳聖書の改訂委員や新改訳聖書の翻訳総主事として労された人である。その名尾博士が、ここの「永遠への思い」という翻訳について、こう言っている;「『永遠への思い』と訳されているのは、『心に』与えられたという意味での『思い』であります。つまり、人間には『永遠性』がないが、これを慕い思う心が与えられたということです」。

ある人は「永遠性」(岩波訳)とか「永遠なるもの」(私訳)という訳語を提唱している。ここでは、新改訳第三版の「永遠」という翻訳を採用した上で、先程の名尾耕作氏の説明のように、この言葉は「永遠への思い」という意味で使われているのだ、と理解して話を進める。

(3)「すべてのものを時にかなってふさわしく造られた神」(11a)は、人間の心に、「永遠を与えた」。但しここでコーヘレスが言う「永遠」とは、「永遠への思い」のことである。即ち、「永遠なるものを慕い求める心、永遠への憧れ、時間を超越した世界を想像する心、時間を越えて過去と未来を問う能力、初めから終わりまでを見極めたいと思う心」、そうした素晴らしい能力を神は人に与えて下さったのである。だから人は「永遠」を思い、「永遠なるもの」を慕い求めるのである。

例えば、愛がそうである。人は「永遠の愛」に憧れる。聖書に「人の望むものは、人の変わらぬ愛である」(箴言 19:22)という言葉があるように、人は皆「変わらぬ愛」を求め、永遠の愛への憧憬を抱くのである。「永遠の命」もそうである。古代中国の始皇帝のように、不老不死に憧れ、時間を超越した永遠の生命を得たいと願うのである。誰の心にも「永遠への思い」がある。コーヘレスは、「それは神が人の心に与えたものなのだ」と言うのである。

(4)伝道者は11節最後でこう語る;「しかし、人は、神が行なわれるみわざを、初めから終わりまで見きわめることができない」。

人の心には「永遠への思い」がある。しかし人間には、「すべてが時にかなって美しい神のみわざ」を見極めることはできない。人は「時」の流れの中に生きているが、人の「営み」は神の摂理のもとにある。しかし、人にはそれが分らない。分からないから幸いだという面もあるが、分からないが故に人間の苦悩があるのもまた事実である。

人間は有限であり、神は永遠である。永遠なる神の御計画は、有限なる人間には知ることはできないのである。

確かに「永遠への思い」は素晴らしい神の賜物ではあるが、時としてそれは人を不安に陥れる。人には、「永遠を覗き見たい」とまでは言わないまでも「せめて少し先の未来のことを知りたい」という思いがある。未来を知りたいのにそれができない。そのために人は不安に陥る。

その不安の顕われの一つが「占い」である。新聞もテレビも週刊誌も占いコーナーが欠かせない。人々が占いを求めているからである。人はなぜ占いに心を惹かれるのか。それは

不安だからである。未来が見えないからである。占いにハマる人は間違いなく不安を抱えている人である。劇作家のベルナルの友人がそうだった。ベルナル自身は占いを完全に否定していたのだが、その友人が「とても良く当たる占い師がいるんだ」と熱心に勧めるので、友人のためにその占い師の所に行った。友人が、「どうだった？」と聞くので、彼はこう答えた；「全然ダメだったよ。彼女の部屋をノックしたら、『どなた？』と俺に質問してきたよ」…。もうご承知だと思うが聖書は「占い」を厳しく禁止している(エレミヤ 27:9)。

### 【3】神を畏れよ(3:12-15)；

(1)「永遠への思い」が人を不安に陥れることがあるのは、「永遠への思い」が「死」について考えさせるからである。人間にとって「永遠」は「死」の彼方のものである。だから「永遠への思い」は、否応なしに「死」を見させずにはおかない。だが、人は死を恐れる。だから死について考えることを嫌う。例えば、ホテルなどで「四」のつく部屋を作らない所もある。「四」は「死」を連想させるので客が嫌がるからだそうである。死を恐れる人は、死への恐れを紛らわすために「永遠への思い」に蓋をして、現実の生活の中に自己を埋没させる。仕事に埋没し、地上の事柄のみに目を向けて、平々凡々たる生活の中に喜びを見出すことをもって事足りりとするのである。故に伝道者も12節でこう言う、「私は知った。人は生きている間に喜び楽しむほか何も良いことがないのを。」。

(2)再び、2章 24 節から 26 節で描かれたのと同じような、伝道者の現実主義的処世訓が登場する。彼は13節でこう言う、「また、人がみな、食べたり飲んだりし、すべての労苦の中にしあわせ[トーフ]を見いだすこともまた神の賜物であることを。」。

ここに再び「神」という言葉が出て来た。「永遠への思い」を賜物として与えて下さった神は、日の下の人生を楽しみ生きることをも賜物として与えて下さった。そのことを感謝して生きようではないかとコーヘレスは提案する。「生きている間は、労苦して得たものを、神の賜物として感謝して受けよう。そして、食べたり飲んだりして、喜び楽しもうではないか」と彼は言うのである。「喜び楽しもう」と言っても単なる快樂ではない。「神への恐れ」を伴った「喜びと楽しみ」である。「喜び」と「楽しみ」という字を繋げれば「喜楽」となる。神の賜物を感謝して喜び楽しむという「喜楽主義」である。時を造られた永遠者であり、万物の支配者・主権者なる神を恐れて、神の下さる賜物を感謝して受けて、「喜楽」に生きようと言うのである。

(3)そして14節で伝道者はこう言う；「私は知った。神のなさはみな永遠に[レ・オーラム]変わらないことを。それに何かをつけ加えることも、それから何かを取り去ることもできない。神がこのことをされたのだ。人は神を恐れなければならない。」。

神は永遠の神である。永遠なる神がなさは永遠に変わらない。最も確実に確かなこと、それが「神のなさること」である。この神を信頼し、「神を恐れて」生きること、それが最も重要なのである。

「人は神を恐れなければならない」とコーヘレスは言う。この言葉は『伝道者の書』の最後に結論として再度登場する。即ち、12章13節；「結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである」。コーヘレスが「これが人間にとってすべてである」とまで言う「神を恐れる」ということを多くの人が馬鹿にしている。この最も根本的なことを否定して生きるから、その人生は虚しく、「死」という怪物に飲み込まれてしまうのである。

「神を恐れる」とは、神を畏れ敬うこと、更に、神を信じて生きることである。結局のところ、人は、隠された時の意味を知ることはできないのだから、「時」を与えたもうた神、時を創造した永遠の神(イザヤ40:28)を信じて、与えられた日々を感謝しつつ、喜び楽しんで生きていくのが一番良い。キリストが死を打ち破り「永遠」のいのちを与えてくれる時に、もっと素晴らしい真の人生が開かれるのであるが、それまでは、神を恐れ、神の摂理を信じて、日々の「労苦の中にしあわせを見いだす」(13)のが良い。私達の内なる「永遠への思い」は「永遠なる神」に出会うまでは真の安らぎを得ることは出来ないのである。

アウグスティヌスは『告白』の冒頭部にこう書いた；「あなた[神]は私達を、ご自身に向けてお造りになりました。ですから私達の心は、あなたのうちに憩うまで、安らぎを得ることができないのです」(山田晶訳『告白』第1巻第1章)。

(4)今日の段落の最後は15節；「今あることは、すでにあったこと。これからあることも、すでにあったこと。神は、すでに追い求められたことをこれからも捜し求められる」。

前半の「あることは、すでにあったこと。これからあることも、すでにあったこと。」は、1章9節の言葉；「昔あったものは、これからもあり、昔起こったことは、これからも起こる」と似ている。後半の「神は、すでに追い求められたことをこれからも捜し求められる」という文は難解であり、様々な翻訳と解釈が提唱されている。

古いものではギリシャ語訳の『七十人訳聖書』が、「神は失われた者を捜し求める」と訳しているが、これは3:6の「捜すのに時があり、失うのに時がある」という言葉と関連付けようとしたものらしい。またラテン語訳の『ウルガタ』訳は、「すでに追い求められたこと」を「過ぎ去ったこと」と訳している。現代語訳に至っては文字通り「その他もろもろ」である。翻訳に於いて既にこうであるから、解釈については推して知るべしである。様々な解釈が提案されているが、これだと言う決め手はない。だがはっきり言えることは、この文章の主語が「神」だということである。即ち、人間の行なう全ての事柄の背後には「神」がおられるのだ、ということである。伝道者はすべての事の背後に「見えざる神の御手」を見ているのである。その「見えざる神の御手」を信じて、永遠を見つめて生きる時、私達は「死」によって終わるだけの儂い虚しい人生と決別できるのである。

**【結】永遠なる神を思え(イザヤ40:28&1コリント13:13)；**

11節でコーヘレスは、「神のなさは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠[永遠への思い]を与えられた。」と言った。永遠なる神が私達の心に「永遠」、即ち「永遠への思い」を与えて下さった。それゆえ私達は「永遠なるもの」を思い、「永遠への憧れ」を抱くのである。「永遠への思い」を与えて下さった神を信じ、「主のなさは全て時にかなって美しい」と信じて、人生を歩むべきである。

御言葉はこう告げる;イザヤ書 40 章 28 節;「あなたは知らないのか。聞いていないのか。主は《永遠の神》、地の果てまで創造された方。疲れることなく、その英知は測り知れない」。そして、同じくイザヤ書 40 章 31 節はこう告げる;「主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ」。

永遠の神を見上げ、永遠の世界を目指して地上の人生を歩もう。その地上の人生に於いて最も価値あるものは何か。「働く者は労苦して何の益を得よう」という伝道者の問いに答え得る労苦とは何か。それは「愛の労苦」である。聖書は、「愛がなければ全ては虚しい」と語り(1 コリント 13:1-3)、こう告げている;「いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。」(同 13 節)。愛の「労苦」にこそ永遠の「益」がある。

聖書は告げる;「いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。愛を追い求めなさい」…『コリント人への手紙第一』13章13節、14章1節。◆